

恥じらいのためらい

うんちがしたい！

試し読み版

オリジナル排泄小説集

18禁
成人向け

恥じらいためらい うんちがしたい！

目次

1. うんちがしたいと言える場所04

2. 楓佳はうんちがしたくない したいと言えない14

3. 幕間 交わす約束、描く明日54

4. 明かし合った腹の内、うんちがしたい56

あとがき92

奥付94

※カラー口絵は奥付の次に配置しています。

小説 : A J

表紙・口絵イラスト : 青緑

うんちがしたいと言える場所

「楓佳もまたわたしの家に遊びに来て……高校でも友達できたんじゃないの？ 例の調理同好会の子たちもいるんだし」

美咲は呆れたような口ぶりで話した。平素と変わらない、感情の起伏を抑えた平坦な表情を貼り付けて話した。だが無意識のうちに口角が上がっているのには、彼女自身では気付いていない。

「もう……それとこれとは別。だって、美咲とたまにはお話したいし、ここが自分の家の次ぐくらいに落ち着くもん」

対して楓佳は、言葉を返すと共にわざとらしく頬を膨らませてみた。クッションを下敷きに、脚を思い切り伸ばして座っており、言葉どおりリラックスしきっている様子だ。

服装も落ち着いた柄のセーターにベージュのズボンと決して気取ったものではない。セミショートに整えた黒髪も、さすがに寝癖が残るような状態ではなかったが、とはいえ特段の装飾は見受けられない。

「まあ、わたしも大概暇人だしね。さ、取り敢えずお茶とお菓子の時間にしようか」

「あれ、今日は愛里も来るんじゃないの？」

「高校生になっても愛里の遅刻癖は治らないっぽい。ちょっと遅れるってさっき連絡あったから、先にいただいちゃおう。楓佳、この好きだったよね？」

「シュークリーム……！ 駅前の洋菓子屋さんのやつだ！ しかも数量限定の！ わあ、並んで買ってきてくれたんだ。ありがとう！」

瞬く間に楓佳の幼げで柔らかな相貌が、曇り無い満面の笑みを形作る。眼鏡の奥の大きな瞳がお日様のように輝き始める——そうさせたのは、美咲がお盆に乗せて差し出した、手のひらほどある大きなシュークリームであった。同じく美咲が給仕した薫り高い紅茶との相性は抜群だろう。

「じゃあ、おやつとの交換タイムってことで。わたしもドーナッツを買ってきたんだ。限定のもあるよ」

「うわ、こっちもカロリー高そう。このシュークリームも合わせたらすごいことに……」

砂糖で厚くコーティングされたドーナッツについて、女子高校生が抱く感想として美咲のそれはもったもなものだ。肥満と言うほどでは決していないが、柔らかな太ももと、ほんの少しばかり怠惰と暴食が見て取れる腹回りをした——やや肉付きの良い肢体を持ち合わせる楓佳にとっては尚更耳の痛くなる話である。

「き、聞こえないっ！ そんなこと考えてたら美味しいおやつに失礼だよ美咲っ」

されど楓佳はこの誘惑に勝てない。午後三時、食欲という本能が間食を求めている。休日である今日も、朝食と昼食は自宅ですっかりと摂ったというのに。そのどちらもおかわりを欠かすことはなく、十五歳の女子に似つかわしくない量をその胃袋に収めて大満足だったというのに。今、テーブルの上に乗ったシュークリームとドーナッツは、楓佳にとってあまりに魅力的に映っている。

「ダイエツトするとか、この前メッセージで言ってたかった？」

「それは……お、美味しいものがたくさんあるのがいけないよね」

指摘する美咲に対し楓佳は目を泳がせた。

彼女はよく食べる。運動部男子も顔負けなほどによく食べる健康家である。学校では、大きな弁当箱に所狭しと詰まった昼食を摂る姿が学級の噂になるほどで、それでも大抵おやつは食べて、加えて夕食には茶碗大盛りの白飯を二杯は食べる。美味しいものでお腹をいっぱいすることが何よりも幸せに感じる楓佳だ。その反動として、元より太りにくい体質といえど、風呂上がりには体重計の数値をにらみ険しい表情を浮かべることもある。年頃の少女らしく、減量と節制を決意することも時にはある。

「まあ、ちょっと肉付き良い方がモテるって言うし……楓佳は、そのままの方がかわいいし、大丈夫だよ」

だがそんないいらしい決意も、次の日の朝食があるいはその日の夕食の際には忘れていることがほとんどだった。長い付き合いで美咲にはそれもお見通しである。

「美咲はスタイル良いからそう言えるんだよ。スレンダーだし、引き締まっているし、綺麗な体だね。はあ、わたしもたまには運動しろってことかなあ」

楓佳の言葉どおり、運動部で鍛えられた美咲の肉体に余分な脂肪はほとんど見受けられず、筋肉質で均整の取れた体付きをしている。だから楓佳の言葉は端的に事実を述べたに過ぎないが、美咲は見るからに嬉しげで、表情の綻びを押さえられていない。学校では物静かなクールビューティーで通っている美咲であるが、大好きな幼馴染に褒められれば、そんな評判は見る影もなくなってしまうようだ。「……脂肪燃焼なら泳ぐのがいいんじゃない？ 市営の温水プール

なら冬でも泳げるから今度一緒に行く？」

「絶対無理。すぐ筋肉痛になるし、泳ぐの苦手だし。というか、バドミントン続けながら泳ぎにも行ってるの美咲……？ そんなに運動好きの変人だったっけ？」

「変人って……まあ泳ぐのは本当に気が向いたらかな。いつもは部活があるから」

シュークリームに手を付け紅茶をすすりながら、楓佳と美咲が話している。二人は幼馴染であって、中学までは同じ学校に通っていたが、高校は別々となり、今では毎日顔を合わせることは叶わない。「練習厳しい？ 電車通学で朝練あるんじゃない？」

「いや結構自由だよ。朝練も来ても来なくてもって感じだから、部員の半分も居ないし、一年だけ自由にならせてもらってる」

だからこそ、こうして直接会えばいくらでも語ることがあった。

他愛の無い近況報告も、嬉しかったことも、楽しかったことも、悲しかったことでも怒ったことでも何でも。まだ酒杯を交わすことが許される齢ではないが、こうやって甘味と紅茶があれば、おしゃべりはどこまでも尽きない。

「あ、楓佳。口元に思いつきクリーム付いている。うん、やつぱり高校生になっても変わらないなあ」

「あはは……またやつちやった。ティッシュ貰っていい？」

大きな口を開けて頬張るせいで、好物を目の前にすると周りが見えなくなるせいで、つい口元を汚してしまいがちな楓佳だ。そんな高校一年生らしからぬ悪癖も、美咲には慣れ親しんだ光景で、どこか安心できるものなのだろう。彼女の穏やかな微笑みはつきりと

そう語っている。

「あ、愛里来たんじゃない」

インターホンの呼び出し音が来客を告げていた。愛里という少女も、楓佳と美咲の仲よりは短い、小学校と中学校は同じであって、登校も毎日一緒だった仲だ。彼女も幼馴染と言って差し支えはない。「遅刻魔が来たか。仕方ない、淹れ立てのお茶にしてあげようかな。楓佳、鍵開けてきてもらってもいい?」

「うん、迎えに行ってくるね」

お互い共に過ごす時間を積み重ねて、しかしそれでも足りない。お互いそれぞれの高校生活があらうと、こうして時間を割いて会おうとする。特段の予定が無かったとしても、それでよかった。

そうして出迎えも終え、テーブルの上には淹れ立ての紅茶が更に一杯。シュークリームとドーナッツももう一人分。ただし、楓佳と美咲の分は既に食べかけた。

「あつ、やっぱり先に食べてるし……! もうちょっと待っててくれてよかったのに」

遅れてやってきてずけずけと不満を口にはするが、愛里の表情は柔らかいまま。

「いつもの寝坊のせいじゃん」

「わたしはシュークリームを我慢できるわけないし」

そして美咲も楓佳も笑顔のまま。しかし気兼ねなく言い合うことができる。

「……これは本当に寝坊だから反論できなくて悔しい顔」

「ぶっ……ふふっ、絶妙に悔しそう……」

「朝弱いのは知ってたけど昼までか……」

「一時間だけ、本当に一時間だけ寝るつもりだったし……」

楓佳は笑いを抑えられず、美咲は呆れ顔を浮かべている。幸い遠慮は要らない関係だ。楽しげなおしゃべりは、尽きるどころか加速する。

「それでさ、なんだかんだ周りが派手な子も多いんだよね。わたしは地味な方だし、一歩引いちやうこともあるよね」

午後三時四十五分。三人はとうにシュークリームとドーナッツを平らげ、幸福に満ちたおやつタイムは既に終わっている。今はテーブルの上に置かれたノートパソコンで当たり障りない動画を流しながら雑談に興じ、どこまでも無為で、しかし大切な時間を過ごしているだけのこと。

「そっか。ギャルっぽい美咲もちょっと見てみたいけど……」

「美咲なんて羨ましいくらい大人っぽい顔立ちだし、それもアリじゃない?」

「いや似合わないそうだなあ。わたしはわたしでポリシーあるんだって、一人でこっそり強がってるけどさ」

ただ、終始穏やかで愛しげな顔をした美咲や、飄々とした口ぶりながら楽しげな表情を浮かべる愛里とは対照的に、楓佳のそれにはどこか陰りが差してきている。健康体ゆえのすべやかでふっくらと

した類から僅かに血の気が引いている。友人たちに応えるための笑顔が、ほんの少しだけ引きつったものに変わる。

キュルルグルルル……ゴポポポ……キュルルッ

「……っ……ん……」

そわそわ。もぞもぞ。床に投げ出した両足を揉み合わせ、楓佳は時折クッションの上の丸々とした尻を動かしていた。いつも落ち着きが無くつい指を弄んだりしがちな彼女であるが、今は一層そんな仕草が目についた。

(……どうしよう、かな。あとは言いつつタイミング、だけど。美咲と愛里だから大丈夫だけど、やっぱり恥ずかしいのは、あるし)

楓佳にとって美咲も愛里もかけがえのない友人である。「友達」という言葉で真っ先に思い浮かべる顔が付き合ひの長いこの二人であるし、今まさにしているように、パーソナルスペース皆無の肌と肌が触れ合う距離で肩を並べても気にならないぐらいの大親友である。だから、楓佳が彼女たちを疎ましく思うなどあり得ないのだが……時には親しい仲といえど一人になる時間が必要なのもあった。でさるならば、親友にさえあまり知られたくない営みだってある。

グギュルルッ……グウウウゴポポポ……

(うんちしたい……っ！ お腹グルグルでゆるいうんち出そう)

その秘密は楓佳がさりげない仕草で撫で擦った下腹の奥にあった。柔肌の更に奥で、明るい黄土色をした軟らかめの糞便が、蛇腹の管を駆け下り尻の方へと押し寄せているのだ——楓佳は便意を催している。大便がしたいのを我慢している。

(うっ、うっうお腹痛い。そろそろトイレ借りてうんちしないと。

でも、美咲の家だから安心できるけど、怖くないけど……今日のは、ぜ、絶対くさいし、時間掛かるし、さすがに気にしちゃうよね)

臆病で引っ込み思案で不器用な楓佳は、家族以外に排便の事実を知られない、後ろ指を差されたくない、蔑まれる心配が無い自宅のトイレ以外では安心して排便をすることができない。ただそれは、あくまで他人から向けられるかもしれない悪意を過剰に想像して恐れているのであって、深い信頼を寄せる美咲や愛里が相手であればそのような心配は要らない。

ここは幼稚園児だった頃から通い詰めた慣れ親しんだ場所であつて、大用のためにトイレを使わせてもらったことだつてある。愛里にだつて出先で堪え難い欲求を告げたことがある。だから気軽に中座を申し出ればいいはずなのだが……とはいえ楓佳は、自らの茶色い事情について堂々と開陳できるほど開けっ広げな性格もしていなかった。美咲や愛里が相手でも恥ずかしいものは恥ずかしい。だから、踏ん切りを付けられずタイミングを伺つてしまう。

(トイレ行きたい……二人に我慢してるってバレてないかな……?)

まだ余裕は十分にあるが、されど排便の欲求は強い。生理現象の荒波に揺られ、楓佳の表情が僅かに歪む。内なる衝動に耐えるために、足の指をフロアリングの床へ押し付けていた。

ギルギルキュルルルッ……グルルグルルッウウウ

そして幾度となく、彼女にしか聞こえない腹の音が響く。健全な便意のそれよりも低音域をなぞり、軟らかく形の崩れた内容物を想起させる鳴動が繰り返される。楓佳を不浄に導く蠕動がそこにある。(うっう、本格的にお腹痛くなってきた。軟らかいうんちが降りて

きてる……調子悪いかも。お腹が緩くなるなんて減多にないのに」

楓佳が出したくなっているのは、平素のような、今日の朝もすっきり気持ち良く出すことができた健康うんちではなく、やや消化不良のまま直腸まで辿り着いてしまった軟便である。ゆえにその欲求は激しく、何より刺々しく不快な痛みを伴っていた。

ゴロゴロ……キュルル……キュウウ……グルルルッ

「……ふう……ん」

無視しようのない、健常ならざる便意がそこにあつた。ドロツとしたお腹の中身を吐き出すべく、しきりに腸壁が収縮を繰り返している。熱を帯びた軟質便が排泄孔へと押し寄せている。毎朝身の詰まった固形便を出せる快便体質で、多少の大食いでは調子を崩すことのない頑丈な胃腸を持ち合わせた楓佳にとっては珍しい事態だ。

(月の日、だからかな？ それでも普段はちよつと軟らかめになるぐらいなんだけどなあ。今朝だって、普通のうんちだったし)

楓佳も十五歳の少女だ。その身体は既に女性そのもので、当然ながら月経も起きる。そして、本来子宮の収縮を起こすための生体物質が大腸にも作用し過剰な収縮を起こすことがある。つまり、月経中はお腹が緩みやすくなる。下すも詰まるも減多に無い楓佳でも、月に一度の一日か二日ばかりは便が少々軟らかくなってしまう。

そして此度は「少々」では済まなかった。偶然の悪戯か、あるいは月の日も意に介さず揚げ物も含め満腹になるまで食べる節制を知らぬ食欲のせいか、楓佳は緩んだ便意を強く催してしまった。今この瞬間も、不調の産物たるドロドロが直腸を隙間無く満たしていく。「ちよつとしたイメチェンなら興味あるけどね ほら、楓佳も中

学卒業のタイミングで今のセミショートにしてるし。前の二つ結びも可愛くて好きだったけど……あ、もちろん今のも似合ってる、よ」

肩まで伸びる漆黒を、子供っぽくて純朴な二つ結びにしていたかつての楓佳を語る美咲は、どこか遠い目をして、懐かしさと愛おしさが滲む湿っぽい口ぶりをしていたが、それよりも楓佳には思案を巡らせなければならなかった。

「あ、ありがと。うん、短くして手入れも楽になったし。美咲が髪型変えるのもちよつと見てみたいかも」

まだおおよそ滞りなく会話を交わすことができたが、実のところその思考は腹腔の内で渦巻く痛みと欲求に囚われている。たつぷりの軟便を、便器に吐き出したくてたまらなくなっている。もう簡単に治まってくれるような便意でないのは明らかだ。

ここでトイレを借りるしかない。あと一時間以上も我慢するのは、今の腹具合を考えれば少しばかり難しい。

グウウ……ゴギョルルルグリユリユツ……ギョルルルッ

(お腹がギョルギョルしてるの治まらない。すごいうんちがしたい。軟らかいのが出そう……トイレ行きたい)

「あ、さっきの期間限定ドーナツの広告出てる。なんだかんだ限定って言われると毎回食べちゃうよね」

「そ、そうだね。こ、ここの限定ってハズレないし……私も毎回食べてるかも」

「分かる。実際美味しい。商品開発の人がすごいよ。多分だけど減茶苦茶良い大学出てる。あれ、学歴関係あるのかなこれ？」

ギョルルルッ……グル、グギョルルルゴロロロッ……！

「あはは、た、たしかに、頭のいい人が考えてそう」

（でも、うんちだから、時間掛かるから、トイレに行きたいって言いにくい。まだ動画の途中だし、これが終わってからのにしようかな）
会話の間にも、泥と化した大便が駆け下り、鋭くも鈍重な痛みが走る。お腹の中で暴れ狂う茶色の汚穢と、望む白い陶器を絶えず想起してしまう。

ゴボポポボグルル……ッ！ グルルグルルウウ……ッ！

（うう……だめかも。やっぱり今すぐトイレ行きたいっ。大きい方だし……さすがにゆるいのは恥ずかしいけど、でも、二人になら、うん、知られちゃってもいいよね）

気の置けない親友たちといえど、大用を明かすのは恥ずかしい。臭い立つ茶色を想像してしまうのが恥ずかしい／恥ずかしいことに違いはないが、嫌な顔をされることはないと心の底から信じられる。排便をからかわれるようなことはないと言言できる。

小学校と中学校の九年間。更に楓佳と美咲については幼稚園の三年間を共に積み重ねて今がある。無論、楽しいことばかりではない。辛いことだって、悩み事だって、耳まで真っ赤にしてしまう恥ずかしいことだってたくさん話してきた仲だ。だからこそ汚辱たる茶色い欲求にも素直になれる。

「あ、あのさ、美咲、愛里……」

緊張は否めないのか声が裏返る。顔面が僅かに赤熱する。
「ちよっと……トイレ、行ってくる……」

だがそれでも止まらず楓佳が続ける。親友は、楓佳がたどたどしい口調でも、笑ったりはしないから。

「うん、りょーかい」

「じゃあ動画止めとくよ」

二人の返事も軽いもので、そのまま立ち去ることもできたがなお楓佳は続ける。

「あっ……えっと、ちよっと時間掛かるかも、しれないから。動画の続き、見てていいからっ」

やはり「うんちがしたい」などとは、「大きい方をしてくる」などとは少し言いにくい。されど何も言わずに長く離席をするのも気が引けてしまうのが楓佳だ。それゆえに、早口気味に、小さな声で「時間が掛かる」と伝えた。すぐに済ましてしまえる小さな用事ではないと告白することができた。

「あっ、うん、分かった」

「いいよ、適当に話しながら待ってるから」

至極婉曲的な表現ながら、その意図に気付かぬほど楓佳の友人たちは鈍くない。少し気まずそうな返事をする愛里も、穏やかに話す美咲も楓佳が抱える欲求を理解することができた。

「い、行ってくる……っ」

そして楓佳はそそくさと立ち上がり、神妙な顔付きで美咲の自室を去っていく。そこで美咲も愛里もからかったりはしない。楓佳が排泄の事情をひた隠しにすることも、出先では排便をしたがらない悪癖も知っているから——軽口も叩き合える仲といえど、超えてはいけない一線というものがある。

（ちよっと気まずいけど、恥ずかしいけど、待たせちゃうし、ちゃんと云わなきゃだもんね。これでうんちができる）

部屋を出た楓佳は然るべき場所を目指す。便器のある場所は美咲の部屋のすぐ近く。考える間もためらう間もなくその扉の前に辿り着いてしまう。我慢をしていた大便ができる。大便をしてもいい。

キュルルキュルルゴロロ……グキュルグウウ……

(お腹緩んじやったのは最悪だけど、美咲のお家でまだよかった。もし学校とかだったら、絶対ギリギリまで我慢しちゃってたし)

緩み崩れた消化の成れ果てが急かすから、楓佳は大便をしないとけない。震える下腹を思わず撫で擦りながら、いよいよ彼女は扉を開けその場へと足を踏み入れた。早く大便がしたいのは事実だが、必死の思いで駆け込むような事態ではない。最も安心できる自宅のトイレほどでなくても、限界でなくとも排便を決意できる場所がこうしてあったのは不幸中の幸いであろう。

美咲の自宅である戸建住宅には一階と二階に一つずつのトイレがあり、美咲の自室を訪れた時には大抵二階のものを使う。そこは清掃も行き届いた空間であって、芳香剤に由来する花の香りが拡がり、用便するのに支障は無かった。

(美咲も愛里も待つてるし、早めに済ませちゃお)

だから楓佳はすんなりと一歩進む。扉の奥に移動する。扉を閉めて一人だけの空間を作り出す。

そして扉の方を向き直し、ズボンのホックを外し、素早く下着と共に降ろす。腰を落として豊満な尻肉が便座へ触れる。一人だけの密室で隠すべきものが露わになる。顔付きは幼げな楓佳ではあるが、開いた膝の間は黒々とした陰毛に覆われているし、何よりも脱いだ下着のクロッチ部分に充てられたナプキンには赤黒いものが染み込

んでおり、十五歳に相応の成熟が見て取れた。

少女が秘密とする領域。その中で最も不淨な器官が、今はまだ皺の集まりでしかない肛門が、便器を捉えている。

(あつ、鍵掛け忘れてたっ！ 危ない危ない……家のトイレほどじゃないけど、安心してていい……)

下半身を晒したまま一度立ち上がり、危うく忘れるところであった施錠もしてこれでようやく排便の準備が整った。

(……うんち、する)

楓佳を駆り立てた軟便は直腸を満たしており、便意は依然強いまま。少しの息みで大便を出せるのは間違いない。

「んっ…………ふっ、ん」

膝の上に置かれた両手が握り拳を作る。微かに声が漏れる。それでも自宅での用便と比べればやや控え目な息みだ。快便体質ゆえに強く踏ん張る必要も無いが、すっきりしたい気持ちが強く、つい声を出してしまうのが自宅での楓佳なのだから。

プウウウーッ！ プリリリプリリッ……！

(結構派手におなら出ちゃった……っ。お腹の調子が良くないから溜まっていたのかも。人の居るトイレじゃなくてよかった……)

息みで腹圧が掛ければガスが漏れるのは致し方ないことだ。あどけない顔付きがかわいらしい楓佳とて、時には派手に尻を鳴らしてしまう……幸い美咲と愛里は部屋に留まっており、美咲の家族も今は不在だ。扉の外にまで及んだであろう甲高く間の抜けた放屁の音も、誰にも聞かれずに済んだ。

「……っ、はあ……うんっ」

(あつ……そろそろ、うんち出そう……っ！)

出口の手前に滞留していた気体は先の盛大な放屁で出し切った。ならば次は本命たる茶色である。本能と理性が排便で一致し、肛門が緩む。塞がっていた孔が一気に拡がり、鮮やかなピンク色がぶくりと膨らみせり出してくる。そして――

「んっ……んあっ……！」

ブリブリブリニチニチニチチブリリリリリリィーッ!!

――溢れる。勢い良く茶色が迸り下劣を奏でる。大便が出る。

ミチミチニチチチブリリリッ!! ミチチブリリリッ!!

「はああ……っ、ふうう」

楓佳は一息でたっぷりの糞便をひり出した。水面に飛び込み沈みゆくものは明るい茶色。半練り状ながら大きく崩れず形を保っている。大小腸が乱れる前に一定の水分吸収を終えていたものが、異常な蠕動と我慢の末の腹圧で、一気に飛び出したのだろう。

(我慢してたから、ズルルって一気にたくさんうんち出た……っ)

思い切り大便を出せた。封水は溶けた汚物の色で濁り、トイレの一室が楓佳の産み出した鋭い便臭で満たされていく。

ギュルルルルグルルル……グウウウウゴロゴロポポッ

だが行為は終わらない。いつもたくさん食べる楓佳の排便がすぐに終わるはずがない。ましてや今の楓佳はお腹の調子を崩しているのだ……彼女をこの場へ導いた欲求の元凶は、まだ腹腔の内に居座っていた。栓となっていたものが便器に落とされ、空いた直腸の空間に緩みきった糞便が殺到し排泄欲がまた込み上げる。

(お腹痛い……っ。ゆるゆるのうんちが降りて来てるっ)

差し込む痛みに、刺々しい便意に楓佳の眉が傾いた。表情と身体が強張るのは更なる排泄に備えるためだ。

「ふっ……ふ、うんん……っ！」

ブリリリリリユブチユルルッ!! ブジュルルルブリリリリッ!!

ブビビッ! ブチユルルルルッ!! ニチチチビユルルッ!!

一瞬全身を震わせると、再び堰を切ったかのように茶色が噴き出していく。水っぽく緩みきった軟便が次々に吐き出されていく。ガスと混ざり爆ぜて響くその音自体が汚物そのもので、拡がる腐敗臭は一層その濃さを増していった。

「ふうう……ふっ、うううんん……っ！」

ブジュルルルブリリリリッ!! ユルルルルビユルルルッ!!

ブポッ、ブビビビッ! ブリブリブリブリリリリリッ!!

(くさいうんちが止まらないっ。お腹がずきずき痛い。早くトイレ出たいのに……美味でも、愛里でも、お腹壊して緩いのしてるのは、さすがにちよつと恥ずかしいのにつ)

楓佳はうんちがしたくない したいと言えない

規則正しい寝息が穏やかなリズムを刻む。心地良さげな寝顔は、その童顔も相まって幼子のように無垢で無防備だ。体温が高く暑がりですぐ汗を掻くため、本格的な冬の訪れにも関わらず薄手の部屋着に身を包んで熟睡している。

「楓佳っ、何で二度寝してるのもうっ！ 早く着替えちゃいなさい」

しかし時刻は午前七時三十八分。普段ならば着替えを含め諸々の支度を終えていなければならない時分だった。まさか部屋着姿のまま寝ているなど、訝しみ楓佳の自室まで様子を見に来た母親も想像していなかった。

「あ、あれっ、寝ちゃってた!? 今何分!？」

呼びかけで跳ね起きた楓佳自身にとっても全くもって想定外のことだったのか、すぐ傍にあるデジタル時計の存在すら忘れて叫んでしまう。

「もう三十八分。バスに乗り遅れたら大変でしょ」

「うそ!? もうそんな時間っ！ まだ全然着替えてないのにつ」

彼女が高校への通学に利用するバス停の発車時刻は七時四十六分。そのバス停まで、瞬発力も体力も平均に遠く及ばぬ楓佳では全力疾走であっても二分は掛かる。制服への着替えも何ら済ませていない状況では最早一刻の猶予も無い。

読書に熱中して夜更かしをしてやや睡眠不足。なんとか定刻に起床し、眠い目を擦りながらも朝食を摂ったはいいのもの、体を休めるべくベッドに横になったのがいけなかった。

「ええっと、制服制服っ！」

だが後悔よりも今はすべきことがある。眠たげな表情を瞬く間に焦燥のそれに変えて着替えに取りかかった。刻限に急かされた楓佳が、シャツとズボンを一気に脱ぎ捨てて。一旦インナーも脱ぎ、装着するブラジャーはショーツと揃いの薄緑色。幼げな顔付きに相反する大きさのバストをしっかりと包み込んでくれる代物だ。

「あれっ!? ブラウス無い!? ああもう時間無いのにつ！」

「ほら、そう言うと思った……これ着なさい」

書籍や学校のプリント類が至るところに積み重なり、整理整頓の四文字を微塵も感じさせない楓佳の自室である。クロゼットにその日着るべき衣服が先んじて並べてある——なんてことはなく、この日は母の助け船に頼るほかなかった。

「あ、ありがとお母さんっ！」

姿見に慌てふためく自身の姿を映し、楓佳は「女子高校生」になつていく。アイロン掛けのされたブラウスのボタンを逸る手付きで留めていく。何度か失敗しながらも青色のリボンで胸元を飾る。制服である紺のジャンパースカートとダブルブレストのジャケットを羽織る。寝ていたせいでせつかく梳いた髪に新たな寝癖が付いてしまっていたがゆっくりと直している暇は無い。

「お弁当は玄関に置いてるから忘れないようにね！」

(バス間に合うかなあ……今から自転車でも全力で漕げばギリギリ遅刻しないけどすごく疲れるし、絶対汗だくになるし……っ)

そしてスクールバッグを肩に掛け、楓佳はドタバタと階段を駆け下りていく。

「い、行つてきますっ！」

布に包まれた愛用の弁当箱もきちんと鞆に入れ、そして楓佳は玄関を飛び出した。まだバスの時間に合うかは定かでなく、彼女の走り次第であろう。焦る表情は変わらない。

「はあっ……！ はあっ！ はあ……っ、ぜえ、はあっ……！」

晴天の下、バス停に向かって駆けてゆく。ローファー履きゆえの走りにくさもあるが、すぐに息が上がるのは主に体力不足のせいだ。胸が張り裂けそうになって、脚が軋んで速度が落ちる。もう十一月も下旬の寒さだというのに、元より代謝の良いその体が汗を噴き出させる。三百メートル弱の距離ながら、途中で一度完全に息が切れて休憩を挟みながらも楓佳は走った。

（よかった、ちょうどバス来るところだ……ぎりぎり、セーフっ）

そんな頑張りのお陰もあって、乗るべきバスが通り過ぎてしまいう前にバス停に辿り着いた。すぐに呼吸は整わず肩で息をしている状態ではあるが、遅刻をせずに済んで、強張っていた表情が緩み安堵の心を映し始めていた。

（やっぱり汗掻いちゃった。むう、多分脇とかすごいことに……学校着いたら制汗スプレーしておかないと）

車両が近付き速度を落としてゆく最中、楓佳の息も整った。身も心も、騒乱から平穏へ、緊張から弛緩へと移ろつていく——
きゅるるる……くるるる……くるるる……

——自律神経は副交感神経が優位に。瞬く間に眠っていた消化器

官の蠕動が勢い付く。下腹の奥に秘めたる質量が蠢きだして、確かに欲求となつてその主たる楓佳へ突きつけられた。

（ど、どうしようっ。うんち、したくなつてきた……寝ちゃつてて全然時間が無かつたから、お家でうんちでできなかった……）

名状し難い“むずむず”と“もやもや”を下腹が感じ取り、楓佳の表情が再び強張り始める。いよいよバスに乗車しようとする直前に、楓佳は便意を催したのだ。普段ならば出発前に解消できているはずの排便欲が込み上げている。少女の、少女らしからぬ大食いを正しく消化した糞便の塊が、今まさに押し寄せて出口を叩いている。（朝のうんちだから、我慢できないかもしれないし。学校で大きな方なんて絶対できないし……今から戻つて遅刻してでも家でする？）

登校してから用便を済ませるなどという選択肢は持ち合わせていなかった。臆病で引込み思案で時に生きづらさを感じる楓佳だから、小さな悪意だつて向けられるのは怖かった。頭では周囲がそんなことを騒ぎ立てる年齢ではないと分かっている、些細な陰口だつてひどく恐れてしまう。他者の悪意を過剰に想像してしまつて、その心を不安で溢れさせる。そんな不条理で不合理な感情のせいで、楓佳は自宅以外で大便をしようとしない。ましてや日々顔を合わせる同級生が居るかもしれない学校のトイレで臭い立つ茶色を晒すなど余程切羽詰まらない限りはしない。したくない。できない。

立ちはだかるのが恥じらいだけならば排泄欲を勝たせられるだろう。まさに数日前に親友の家で大用を済ませられたように。けれど楓佳自身でも合理的な説明のできない不安と恐れが、この十五歳の少女を縛り付けている。

(でも、うんちのせいで遅刻するのも情けない。わざわざ帰ったら絶対お母さんに怒られる……我慢、できるかな)

彷徨う間にも時は過ぎ、特徴的な圧縮空氣の抜ける音と共にバスの扉が目の前で開く。

(ああもう、とりあえず乗らなきゃっ！ だ、大丈夫だよね?)

結局、導いたのはどちら付かずの結論だった。自宅のある方向に目を遣り、後ろ髪を引かれる思いを抱えながらも、楓佳はバスに乗り込んでしまった。学校で便意を解消する覚悟はできていない。されど割り切って自宅に戻る判断もできず、為すべき決断から背を向けて我慢を選ぶ。根拠は欠片も無いが我慢ができると思ってしまう。苦手なこと、恐れることをいつも先送りにしてしまうのも、楓佳

の悪癖の一つだ。真面目な割に、嫌いな科目の課題は提出日寸前に終わらせるのが常だった。小中学校でのクラス替えでは、皆に馴染もうと意気込んでも、最初の一声が掛けられず、中々友達を作れないでいた。せっかく人の輪に交ざっても、友達相手以外では口下手も相まって口を閉ざしてしまいがち。そして、怖くて仕方がない自宅以外の排便は、いつだって限界寸前まで我慢をしよう。

つまり楓佳にとって、踏み出すことはとても難しい。大便をするかしないかという些細なこと／彼女にとつての一大事であっても。(うんち、したい。トイレ行きたいのに。毎日してる朝のうんちなのに……夕方までずっと我慢だなんて……)

彼女を含み数人の乗客が乗り込むと、扉が閉まりバスが再び動き出す。身動きの取れない超満員までは至らないが、朝の通勤通学時間帯ゆえに座席は埋まり、相応に混雑した車内に楓佳は立った。

大慌ての身支度と疾走のせいで、髪は少々乱れ、リボンはやや傾いて、首筋や胸元に幾重もの汗を滲ませるなど完璧な状態ではなかったが、されど彼女は今をきらめく女子生徒として見られている。重量感ある紺のブレザーが清潔を、膝丈のスカートが清楚を主張し、他の乗客もそれを疑いはしない。自分自身の容姿に自信を持てるような性格をしていない楓佳であるが、瑞々しくすべやかな肌も、ノンメイクながら形の整った眉も、くつきりとした大きな瞳も非の打ち所がなかった。ほどよくふっくらした顔付きは、純朴な造形でありながら愛らしさと可憐を存分に表現している。

だから、通学途中のかわいらしい女の子として楓佳はここにいる。憂いのある顔付きで窓の外を見つめる姿だって、いじらしい恋煩いといった類いの印象を抱かせたって何ら不思議ではない。

ぐるぐるぐるぐる…… きゅうう~~~~きゅるるるるるっ

(っ、今は結構したいけど、しばらく我慢すればお腹も落ち着いてくれるはず。そしたら、放課後まで我慢できるはずだから……)

けれど実態は汚い茶色をしていた。少女は自宅で出せなかった重たい汚物を腹腔の内に抱え、鎌首をもたげる排便欲に苛まれている学校でどうしても大便がしたくなくて、この蠕動が治まることを切に望んでいる。そんな秘めたる事情を誰が想像できようか。

「……はあ」

楓佳の溜息がディーゼルエンジンの騒音に溶けていく。少女の大きな悩み事を乗せたままバスは目的地に向かって進んでいく。

バスは揺れ続け、楓佳が窮まった視線で見つめる窓の外の街並み
が移ろっていく。されどまだ道は半ば。楓佳の目的地たる学校最寄
りのバス停まではあと十分ほどの時間を要する地点にあった。平素
ならば本を読み進めるかスマートフォンを眺めているうちにあっさ
りと過ぎてしまう距離である。

ぐるぐる……きゅるるぐるるるっ

「はあっ……くっ……ふう……ふっ」

無論、もう遅刻の心配など無いのだが、楓佳の表情は深刻そのも
のだ。眉が傾き、眼鏡の奥の瞳に切迫の色を映し、祈るような視線
を窓の外に向けている。僅か十分といえど、急ぐべき切実な事情を
抱えた楓佳にとっては長過ぎるぐらいだ。

ぐるぐるぐるるるうーっ きゅるるるるるる……っ！

（あうっ……うんちしたいうんちしたいうんちしたいっ！ だめ、
放課後まで我慢したかったのに、うんちがしたくてたまらないっ！）
内なる欲求に耐えるべく吊り革を握り締める。額に脂汗が滲
む——目指すべき場所は、今は学校よりもトイレだった。

楓佳は堪え難い猛烈な便意に責め立てられている真っ只中。大質
量の便塊が直腸を怒張させ、閉ざされているべき出口を激しく叩く。
できるならば自宅以外で大便をしたくなかったが、そんな臆病に
由来する希望は既に打ち砕かれている。数時間の我慢どころか、あ
と十分ですらその尊厳を危うくしかねない欲求の嵐が吹き荒れてい
る。望むと望まざるとに関わらず、楓佳には一刻も早く便器という
救いが必要なのだ。

（甘かった……っ。朝のうんちだもん、すぐに我慢できなくなっ
てもおかしくないのに。昨日だって、すごしたくて彩花ちゃんを急
かしちゃったぐらいだし……本当にどうしよう、トイレっ）

願っても悔恨も意に介さず楓佳の大腸の動きは活発そのもので、愚
直にその役割を果たそうとする。彼女の消化器官はどこまでも健康
で、それゆえに老廃物を吐き出そうとする働きも強烈だ。

今日の朝ごはんは白飯を茶碗二杯と目玉焼きとソーセージにたっ
ぷりの生野菜も食べて楓佳の胃袋は大満足だ。その強い刺激が胃か
ら大腸にまで伝播し、力強い蠕動を巻き起こしている。眠っている
間に消化と吸収を終えた食べ物の絞りかすが肉壁の波に乗って出口
を目指していた。

朝起きる。朝食を摂る。お腹が刺激される。大便がしたくなる。
大便を出す……そんな習慣が楓佳の体には染み付いている。平素と
異なる慌たらしい朝の事情などその肉体が知る由も無く、ひたすら
に便が直腸へ装填され欲求は高まるばかり。快便という健全で健康
な日常が、登校前にお腹をすっきりさせられる／学校で催す可能性
を減らせるありがたい体質が、今は彼女自身に牙を剥いていた。

（下しちゃったわけじゃないけど、今日はお腹キツイ日だ……
ううう、重たいうんちが一気に降りてきている感じがするっ）

押し寄せるのは消化と吸収を正しく終えた至った健康的な固形便。
しかしそれは食に貪欲な楓佳の一日分である。欲求の強さはお腹の
気分次第であるが、日課であるがゆえに朝の便意は強めなことが多
い。特にここ数日は食欲が暴走気味なせいで、朝に自身でも驚くよ
うな「成果」を出してしまう日が続いていた。お腹の重さと便意の

強度は比例するものだ。せめて脂質糖質の過剰摂取は避けようと、意図して増やした野菜と根菜に含まれる食物繊維も、糞便をかさ増ししているに違いない。

ぐうううぐるるるるるっ……ぐる、ぐるぐるぐるっ、ぎゅるる

（また波が来たっ……こ、こんなの一日我慢なんて絶対無理っ！
は、早くトイレ行かないと、うんち出ちゃう……っ！）

願っても虚しくパスは赤信号での停車を繰り返し楓佳を焦らす。その間にも下腹が激しく鳴動し、排便欲がとめどなく加速する。お腹のむずむずは既に最高潮。揺れる車内で楓佳は何度も下腹を撫で擦り、小刻みな足踏みを繰り返した。

明かし合った腹の内、うんちがしたい

そうして楓佳も楽しみにしていた土曜日が訪れる。小雨がちらつく曇天の空模様ながら、楓佳は傘を差して意気揚々と歩いていく。楽しみに急かされ、歩調は自然と早くなった。

「あつ、お、大熊です。智恵の友達で、それで、えっと」

「楓佳、今日はわたししか居ないし、そんなにかしこまらなくても……まあ、開けるから待ってね」

智恵の自宅があるマンションは、エレベーターに辿り着くにも自動ドアがあり、入居者が許可を出さなければ開かないセキュリティがある。初めての体験に戸惑いながらも進んでいった。

（服はこんな感じで大丈夫だね。やつぱりちよつと緊張する……）

期待を抱きながらも、若干の緊張を拭えぬ楓佳はエレベーターに設けられた鏡で最後の服装チェックを試みる。友人宅とはいえ、初めての訪問を意識してか、胸元にリボンの付いたブラウスとベージュのカーディガンに、赤を基調とするチェック柄のスカートでその身を着飾った。背中も見ようと一回転——したところでエレベーターが到着し、そんな姿を他の住人に見られ赤面する場面もあった。

「お、お待たせ」

「楓佳、遠いのにありがとね。莉緒も来てるし、ほら入って入って」
出迎える智恵も、自宅ながら袖口と襟にフリルの付いたチュニックとふわふわスカートを基調とする外行きファッションである。落ち着いて大人びた性格の割に、智恵はどこか子供っぽいかわいさ重

視な服装をいつもしてしまふ。

「おお、楓佳もお出掛けスタイルだ。かわいいじゃん」

「そ、そうかな。あ、ありがと」

感情が顔に出やすい楓佳は褒められ照れ臭そうに笑う。先に智恵の部屋に到着している莉緒は気取らない格好で、ジッパー付きのパーカーにデニムのショートパンツを組み合わせている。

「智恵は自分の家なのに気合い入れすぎ。どんだけ楽しみだったのかなあ?」

「うるさい。ほら、莉緒はそのままゲームでもやってなさい」

少女らしく飾られた部屋は、三人の少女が入っても窮屈を感じさせない程度の広さがある。ハシゴで上がれるベッドの下には学習机や本棚を置き、面積を有効に活用した部屋には、既に菓子類が置かれた丸テーブルも、人数分のクッションも、テレビもあり充実した空間となっていた。

「ここ、座っていいかな?」

「あんまり遠慮しないで。ほら、のりしお味好きって言ってたよね。食べて食べて」

クッションの上にちよこんと座る楓佳。気心知れた二人とはいえ、慣れない場所ですい髪を弄んでしまふ。最初ばかりはそうだった。

「よしつ、智恵のゴースト抜いたよっ!」

「はあっ!? な、なんでわたしを差し置いて記録更新してるのよっ! ちよつと対戦するよっ!」

「ふふっ、レースゲームは得意なんだよね」

「わ、わたし、これ何度かやったことあるけど全然できないよっ!」

三人揃っていきなり始まったテレビゲームでの対戦は白熱し、最初ばかりは緊張していた楓佳や智恵も、すぐにぐだきつた雰囲気となった。

「……とりあえず、負けず嫌いな智恵は将来ギャンプルとかやっちゃだめだよ。あと楓佳は……あー、免許は取らない方がいいかも」

「あ、あと三戦やったら絶対勝ち越せてたしっ！」

「でも、大学生になったら、ちよっと車運転してみたいし……」

昼食を済ませてからすぐに集まった三人だが、時間はあつという間に過ぎていく。知らない間に窓の外に見える日が傾いていく。

「じゃあ智恵の小さい頃の写真探そうぜのコーナーっ」

「それやったら今日はベランダで寝てもらおうのでよろしく」

「あはは、小さい頃の写真ってまあまあ恥ずかしいよね」

今日は日が変わって明日になるまで、朝を迎えて「おはよう」を言い合うまで一緒。緊張もほぐれ、憂いもなく、楽しいばかりの時間が続くはず。

* * *

雨降りゆえに、面倒臭がちな智恵がビザの出前を主張する一幕もあったが、楓佳も莉緒も「せっかくのお泊まりで出前など取っては調理研究会の沽券に関わる」などと声高に主張し、近場の食料品店に傘を差して材料の買い出しに行った。

「ちよっとオシャレなメニューにも挑戦してみよっか」

女子高校生らしく、上品に、見た目麗しく、願わくばSNSで映えるようなメニューを——などという主張も莉緒から為された。

「あ、わたし唐揚げ食べたい」

けれど楓佳は食欲に忠実だった。おやつを多少つまんでいたとはいえ、お腹をペコペコに空かせた少女が、話の腰を真つ向から折りにいった。

「お、オシャレの欠片もない……っ 全然女子高生らしくない罪でSNS大炎上だよ楓佳っ」

「おいしいごはんのためなら炎上したって構わないもん」

家族用の大きな鶏もも肉パックを大事そうに抱え、力強く主張する楓佳には智恵も莉緒も敵わない。

「それじゃあ、唐揚げやるなら、油がもったいないしポテトも揚げよっか」

「いいんじゃない。あ、わたし皮付きのやつに一票」

当初は自炊を面倒に思っていた智恵も、一度興に乗れば積極的にメニューへ口を出した。

「あはは、ツッコミ役の智恵が止めなかったら、楓佳のせいでもメニューがどんどん運動部男子の集まりみたいになるじゃん」

十五歳ないし十六歳。今をときめく女子高校生。されど食べ盛りで料理好きな少女たちであって、今は非日常たるお泊まりの一場面。食材の買い過ぎもやむを得ないことである。

そうして三人で囲む夕食のメニューは、唐揚げにポテトと重たい揚げ物から始まり、自家製ドレッシングを用いたサラダ、映え狙い

のオシャレなカブレレーゼ、豆入りトマトスープ、魚料理として鮭のムニエル、そして炭水化物としてペペロンチーノである。広々としたキッチンと三口のコンロを存分に活用して、手先が器用な莉緒が主に包丁での切る刻むを行い、慎重で冷静な智慧が主として煮焼きを担い、舌に自信のある楓佳は味付けや仕込みを重点的に担当し、三人でこの食卓を作り上げた……作り上げてしまった。

「いや完全に作りすぎでしょっ!?」 女子三人だよねわたしたち!?」
いつもは冷静で落ち着いた智慧が「いただきます」の寸前になってようやく叫ぶ。とはいえ楓佳の次に楽しそうに調理に取り組んでいたため、強くは言えない立場でもあった。

「わ、わたしも楽しくなって、つい……あはっ、やりすぎたねえ」
いつもお気楽で笑顔な莉緒とて、浮かべる笑みをやや引きつらせてしまうほど。積極的に煽ってしまったとはいえ、やり過ぎた自覚は大いにあった。

「でも、いっぱい食べられるのは幸せ……ねえ、早く食べようっ」
そして家族用のダイニングテーブルに所狭しと並べられた料理に熱い視線を送り、今にも涎を垂らしそうなのが本日の料理長であり主犯の楓佳であった。

「まあ、作る前から薄々気付いてはいたけどさ……食べきれなかったら明日に回そっか」

「そうだね智慧。まあ、お腹空いてるし、楓佳ほどじゃないけど、いっぱい食べちゃえるかな」

量の問題はともかく、三人が手を掛けて仕上げた料理だ。レシピについても定番で人気のものを用いており、食材も決して高価では

ないが吟味をしている。それゆえ出来が悪いはずがない。三人揃って手を合わせると、すぐに三人揃って舌鼓を打った。

「やっぱり自分たちで作ると本当においしく感じるよね。準備も片付けも大変だけどさ」

いつもどおり楓佳の食べっぷりは尋常ではない。少しばかり肉付きが良いとはいえ、平均を逸脱しないその体軀からは到底想像の付かない量の料理が吸い込まれていく。満面の笑みで次々に頬張っていく。

「絶対太るけど……今日はもういいやつ。いっぱい食べてやるっ!」
節制を心掛ける智慧とて、仲の良い友人と囲む食卓が楽しくて、明日体重計と向き合う覚悟を決めて箸とフォークを動かし続けた。

「んうううやっぱりみんなで作ってみんなで食べるとおいしいよね」
体格に恵まれた莉緒は、健康家の楓佳ほどでないにしろよく食べた。肉も魚も野菜も、その胃袋が膨れ上がるほどに食べてしまった。

「ごちそうさまでしたっ! もう、大っ満足! お腹いっぱいになった!」

楓佳の溢れんばかりの食欲を満たすというのは尋常なことではない。そのお腹は衣服越しでも注視すれば分かるほどに膨れていた。

「さ、さすがに凄いいね楓佳……半分近くは楓佳が食べたんじゃない? はあ、これ以上は食べられない……っ 二食分は食べたもん」

智恵はさすがに調子に乗った自覚があるのか、半ば後悔を滲ませた口ぶりである。決して少食ではないとはいえ、普段の夕食の倍近い量を食べれば苦しくもなろう。

「みんなで食べて楽しかったけど、限度つてものはあるよねえ……」

莉緒も最後までおいしく食べていたとはいえ、圧倒的な満腹感のせいで、椅子に背を預け動けなくなっている。

「なんで、ほぼ食べ切っちゃったかなあ……」

長期戦にはなったが、三人はテーブルの上に並べた料理のほとんどを完食していた。その成果の多くは楓佳によるものだったが、智恵と莉緒の貢献も相当なものである。

「ふふ、結局明日の朝ごはん分がちよつとしか残らなかったし、これは改めて明日また作らないとだね」

「楓佳、この状況で次のごはんの話でできるのはすごいよ……」

「あはは、作るのはいいけど絶対軽めのにしようね」

調子に乗って作りすぎるほどに、三人で一つの食卓を作り上げる営みが楽しかったのも事実。満腹の状態ですら明日の朝食を思い描く楓佳に呆れつつ、しかし智恵も莉緒も笑顔で応えた。

* * *

面倒な食器と調理器具の片付けもまた三人で分担をし、その後はまた智恵の部屋へ戻ってゆったりとした時間を共に過ごした。お泊まりの夜は長い、話題は全く尽きなかった。教室ではしづらい話だって、秘密にしたい話だって、ここではいくらでもできる。

娯楽はそれだけではない。夕食前に引き続き、テレビゲームを起動する。今度はいわゆるアクションRPGだが、難易度が高く、ゲームオーバーになるごとに交代しつつ、和気あいあいと楽しんだ。

三人共に心の底から楽しんでいるのは間違いない。そこに偽りがあるはずもなく、このまま穏やかで居心地のよい時間が続いている……はずだった。

しかし、三人でゲームのコントローラーを回して順番に遊ぶ最中、智恵と莉緒に挟まれ座る楓佳は、どこかむず痒そうな表情を浮かべていた。その所作もどこか落ち着かず、クッションの上で尻をもじつかせ、髪の手端を弄んではそわそわとしている。

（どうしよう……行かないと、だけど……）

それは智恵も多かれ少なかれ同じだった。友人と共に過ごし、平素は仏頂面になりがちな相貌を柔らかく綻ばせていたが、十数分前からは少しばかり眉間に皺が寄っている。座ったまま何度も脚を組み替えており落ち着かない様子だ。

（自分の家だし、好きに行けばいいんだけど……ちよつと、ね）

そして莉緒までもが、常に天真爛漫な笑みを浮かべる表情に、今のは困惑と焦燥を映している。コントローラーを任されていない時には、何度も廊下へと繋がる扉の方に思わず視線を向けてしまう。

（行きたいけど……うう、タイミングが微妙……まだ我慢できるし）

「楓佳、そこわたしがさつき取ったアイテムあるよ」

「……あつ、うん、ちゃんと回復取らないとボスが辛いもんね」

「あはは、智恵もよく見つけたよね。こんな意地悪な配置」

表面上は変わらず楽しく会話を交わす三人にも、今日は何でも言い合った三人にも、お互いまだ言えていないことがあった。

「わたしも、ずっと、うんち
したかったけど、やっぱり、その、
気になっちゃって、言えなかった」

引っ込み思案で不器用な女の子は

「うんちがしたい」を上手に言えない。

安心できる場所ではすっきりうんちをできても、
すぐに怯え、ためらい、恥じらい、
我慢をしてしまう。

それでも蠕動は止まない。

それでも素直になりたい居場所はそこにある。

小説
イラスト

A J
青緑

制作サークル
少女排泄表現開発事業団